

# 焼失住居を考える

－燃えたイエ、燃やしたイエ、燃やされたイエ－

神奈川県教育委員会教育局  
生涯学習部文化遺産課  
中村町駐在事務所 井澤 純

1. はじめに
2. 焼失住居について
  - ・ 焼失住居の呼称
  - ・ 建築部材に係る名称（用語）
  - ・ 焼失住居の認定要素と分類
  - ・ 焼失住居の検出割合
3. 復原住居の焼失実験と焼失した復原住居の検証
  - ・ 計画的に行われた焼失実験
  - ・ 不慮の火災事故後の現場検証
4. 焼失住居の見方・考え方
  - ・ 炭化材、焼土
  - ・ 出土遺物
  - ・ 土層堆積状況
  - ・ 焼失住居調査等から期待されること
5. 個別の調査事例から焼失住居を考える
6. おわりに

## 1. はじめに

現代の火災事情（消防庁「平成25年度消防白書」より）

- ・平成24年中の出火件数 総数44,189件、うち建物が25,583件（約58%）
- ・建物の出火原因 うち不明や調査中を除く22,282件中、放火及び放火の疑いがあるもの1,319 計3,827件（約17%）。残りの約80%強がたばこ（2,583件約12%）の他、コンロやたき火、ストーブ、電気配線の漏電等の失火によるもの。

## 2. 焼失住居について

- ・「焼失住居」の呼称について

- ・建築部材に係る名称（用語）【図1】

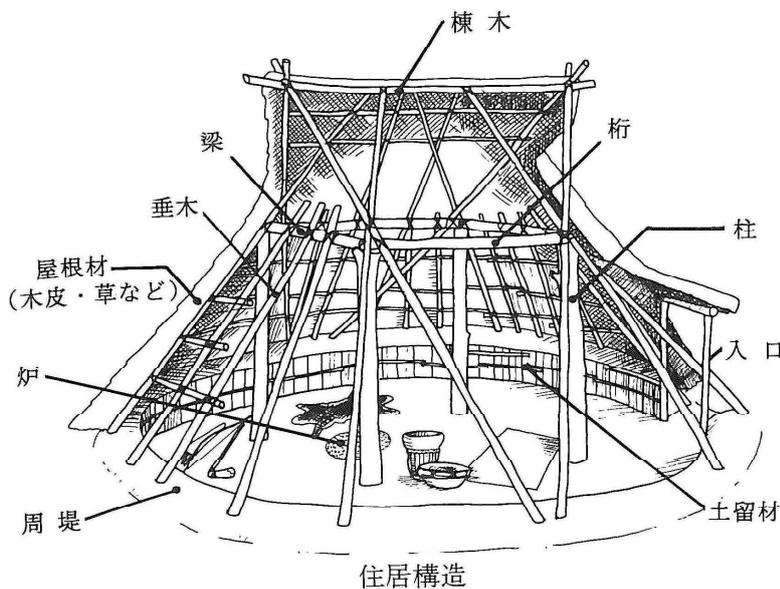


図1（戸沢編1994）

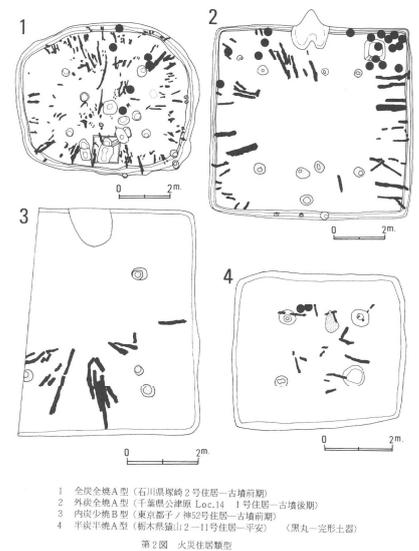


図2（石野1985）

- ・焼失住居跡の認定要素と分類

### ① 桐生直彦氏：縄文時代火災住居の認定要件（桐生1999）

- A 床面・壁面など堅穴部内面に被熱痕が認められる。
- B 建築の構築材（床材・敷物・柱材・壁材・屋根材・梯子等）が炭化材として遺存する。
- C 床面上から覆土中にかけて炭化物や焼土の存在が目立つ。
- D 床面上に残された遺物に被熱痕跡が認められる。

### ② 寺沢薫氏による焼失住居と考えられるものの諸パターン（寺沢1979）

関東以西の弥生～平安時代の焼失住居を炭化木材、焼土面、炭灰層、焼土塊、炭灰粒の有無によりA～E類に分類

### ③ 石野博信氏の焼失住居の類型（石野1985）【図2】

弥生時代から平安時代の火災住居を炭化材、焼土の多寡とそれらの残存場所（全体、外区、内区の3パターン）に土器の出土量を組み合わせて分類。

炭化材。焼土が住居全体に広がるタイプ（全炭全焼型）、炭化材・焼土が外区に集中するタイプ（外炭外焼型）など。さらにこの類型に加え、出土土器の多い（A型）、少ない（B型）を根拠に住居の焼失原因にまで言及（石野1985）。

例)・全炭全焼A型：放火・失火・飛火等による不慮の火災。

- ・全炭全焼B型：自らの意図的放火、あるいは他による放火を事前察知していた場合の火災。
- ・外炭外焼A型：住居内中央部を火元とする放火・失火・飛火。
- ・外炭外焼B型；住居内中央部を火元とする意図的放火。

④(独法)国立文化財機構 奈良文化財研究所による基準(岡村他2008)

全国の都道府県の事例を収集するにあたり焼失建物を認定する基準・観点を規定。竪穴建物の床面上から壁に掛けて、建物の上部構造の状況を反映する形で炭化材が出土し、または焼土塊が伴って出土する場合をA1。A2、B～E類に分類し焼失竪穴建物と認定、ただしB～E類には判定に迷うグレーゾーンもあるとした。

・焼失住居の検出割合

縄文時代：東京都内で約2%（中期1.5%）（桐生1990）、長野県内3.3%（中期）、北海道内では5.2%（中期で7.05%）。（大島1974・桐原1976・関間1997）  
 弥生時代：神奈川県域の2221軒の弥生住居の集計では、焼失住居の比率は、宮ノ台期21.2%、後期13.7%、庄内期12.1%（神奈川県立埋文センター弥生時代研究プロジェクトチーム 1995）。

（南関東の弥生集落の焼失住居比率例）単純平均では宮ノ台期で32%、後期で24%という高い割合になる。特に宮ノ台期の鶴見川水系では40～50%が焼失住居である集落は珍しくない。（久世2001）

3. 復原住居の焼失実験と焼失した復原住居の検証

表1 火災実験等の比較

文献	寺沢 (1979)	井上 (1900)		石守 (1905)		石守 (2001)	大塚 (1997)	村本他 (2005)	J・D-14
観察形態	火災後の観察	火災実験	火災実験	火災実験	火災実験	火災実験	火災実験	火災実験	火災後の観察
上屋の形式 <sup>*)</sup>	伏屋C式	伏屋C式	伏屋C式	二段伏屋式	伏屋C式?	伏屋B式	二重伏屋式	伏屋B式	伏屋C式
屋根の形態	草葺き**)	草葺き**)	草葺き***)	草葺き****)	草葺き****)	土屋根	土屋根****)	土屋根	草葺き**)
実験前の住居の状態	居住可能?	居住可能?	居住可能?	簡易な構造	簡易な構造	簡易な構造	居住可能か?	居住可能	居住不可
屋根材	鎮火後の位置	落下	落下	落下	落下	落下	落下	落下	落下
	炭化の状況	◎?	◎?	○?	◎?	◎?	◎?	△?	△
垂木	固定位置	梁・桁に固定?	梁・桁上	梁・桁上	梁・桁上	梁・桁上	-	不明	梁・桁上
	鎮火後の位置	落下せず?	落下	大部分が落下	落下	落下	-	落下	大部分が落下
	炭化の状況	×	△	△	○	○	-	壁側は○?	不明
梁・桁	固定位置	不明	主柱上	主柱上	主柱上	主柱の横	主柱の横	主柱の横	主柱上
	鎮火後の位置	落下せず?	落下	落下	落下	落下	落下	落下	落下した材あり
	炭化の状況	×	◎?	不明	◎?	○	◎	不明	○
主柱	鎮火後の位置	変化なし?	折れたもの有?	折れたもの有	折れたもの有	折れたもの有	折れたもの有	変化なし?	変化なし?
	炭化の状況	×	×	不明	折れたものは○	折れたものは○	折れたものは○	×	×
備考	ボルト止め?	-	実験時小雨	番線等使用	-	-	-	-	廃屋状態

凡例

◎：炭化良好、一部炭化 ○：炭化良好 △：部分的に炭化 ×：表面のみ炭化 記号?：文中に記載なし、写真より判断

- \*) 宮本 (1996) における上屋形式の分類基準を元に分類。
- \*\*) 茅葺きか?
- \*\*\*) ヨシス等も使用した簡易な屋根
- \*\*\*\*) 下葺きに藁 (稲藁か?) 使用。

【火災実験一覧】（加曾利貝塚）貝塚博物館紀要33（山本他2006）【表 1】

- （寺沢1979） 大阪府観音寺山遺跡の復原住居の火災事故検証
- （井上1990） 東京都神谷原遺跡における復原住居（2軒）の焼成実験
- （石守1995） 群馬県矢田、多比良における簡易な復原住居の焼成実験
- （石守2001） 群馬県多比良追部野遺跡における復原住居の焼成実験【図 4】
- （高田2005） 岩手県御所野遺跡における復原住居の焼成実験
- （山本他2006） 千葉県加曾利貝塚の復原住居の火災事故検証

【参考】

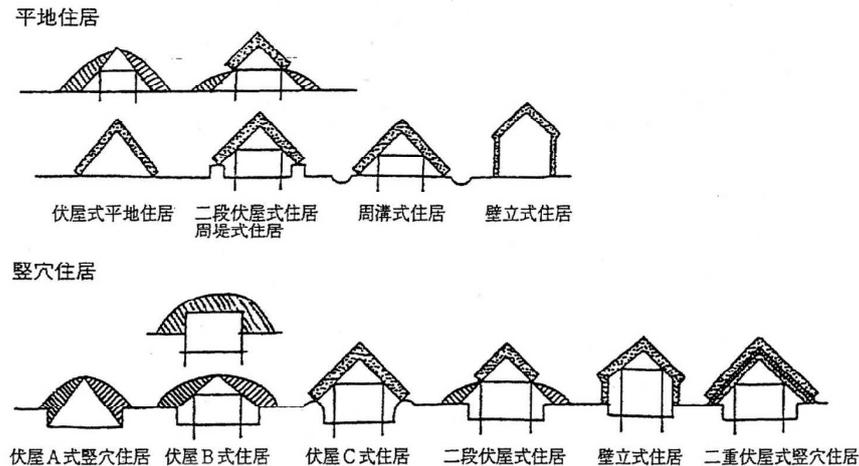


図 3（高橋2002：原典 宮本2000）

4. 焼失住居の見方・考え方

(1) 住居の焼失状況

- ①炭化材：形状、出土位置、出土層位、樹種等
- ②焼土：形成範囲、形成位置・層位等
- ③遺物：種別、遺存状況、出土位置、出土層位、被熱の有無等
- ④土層堆積状況：遺物包含層、無遺物層、焼土層・炭灰層等の堆積層
  - ・土屋根、草・茅葺きの別：御所野遺跡、黒井峯遺跡、中筋遺跡
  - ・土石流（火砕流）の流入：黒井峯遺跡、中筋遺跡【図 5】
- ⑤炭化材、焼土、遺物相互の出土・検出状況：分布状況、上下・新旧の関係

(2) 焼失住居の位置とその周辺

- ①焼失住居：集落内の位置、分布状況→高地性集落に多い（北陸：弥生時代）
- ②焼失住居周辺：周辺の焼失住居の有無、非焼失住居の有無、位置関係
  - ・生活状況：土器等の収納・利用場所、夏用住居・冬用住居（中筋遺跡）
  - ・焼失原因：戦乱（北陸等：弥生後期、東北：古代）
  - ・ライフサイクル（集落全体の活動の中で位置づける）

(3) 遺跡・遺構・遺物以外を見る  
 ・焼失実験結果、文献、民俗例

(4) 焼失住居調査、実験等から期待されること

- ① 焼失方法・原因：失火、他者による放火、自主的な放火等
- ② 住居構造の復原（上屋等）
- ③ 住居内における日常生活：屋内の使用状況
- ④ 想定される慣習・習俗、社会状況、住居のライフサイクル等の検証

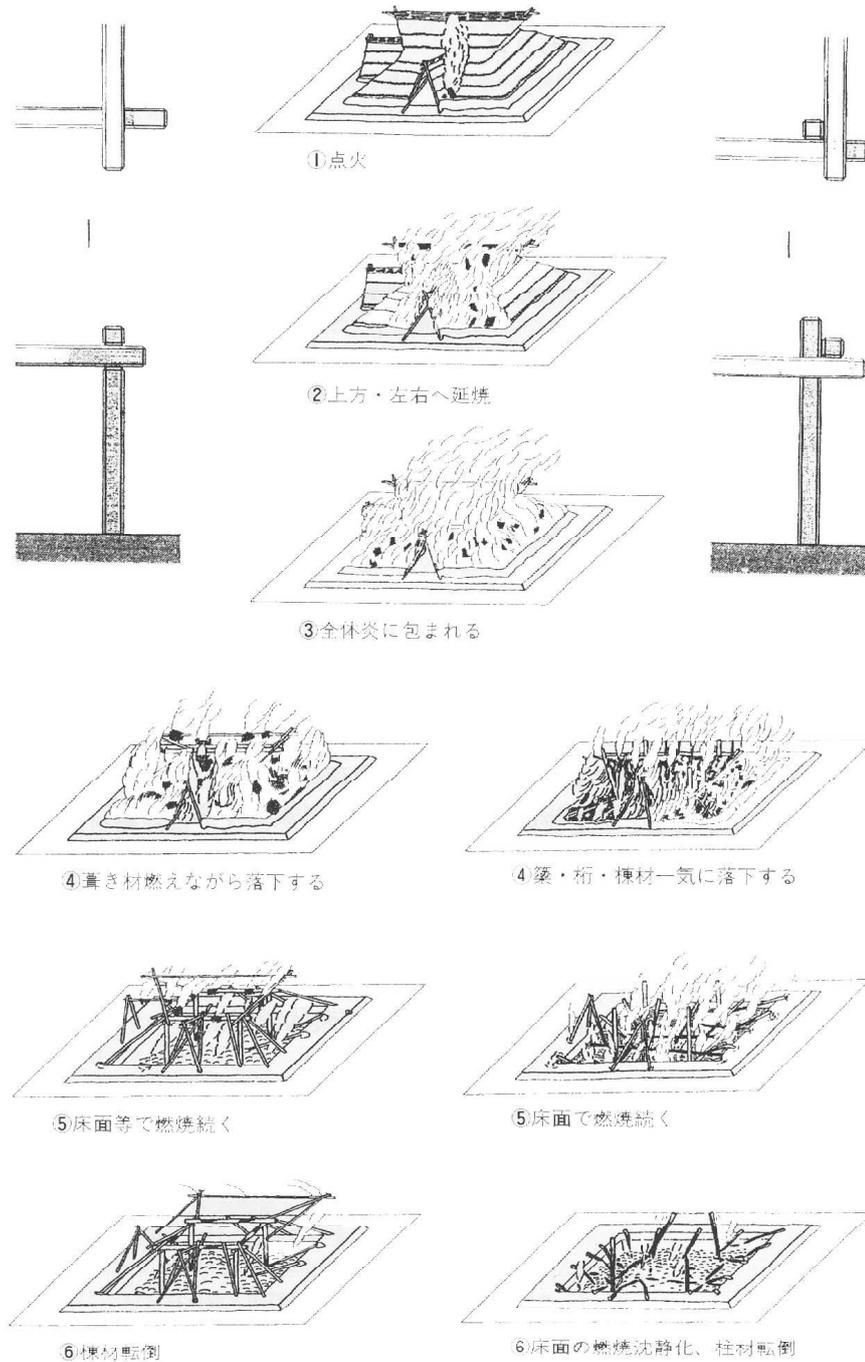


図4 焼失実験結果（石守2001）

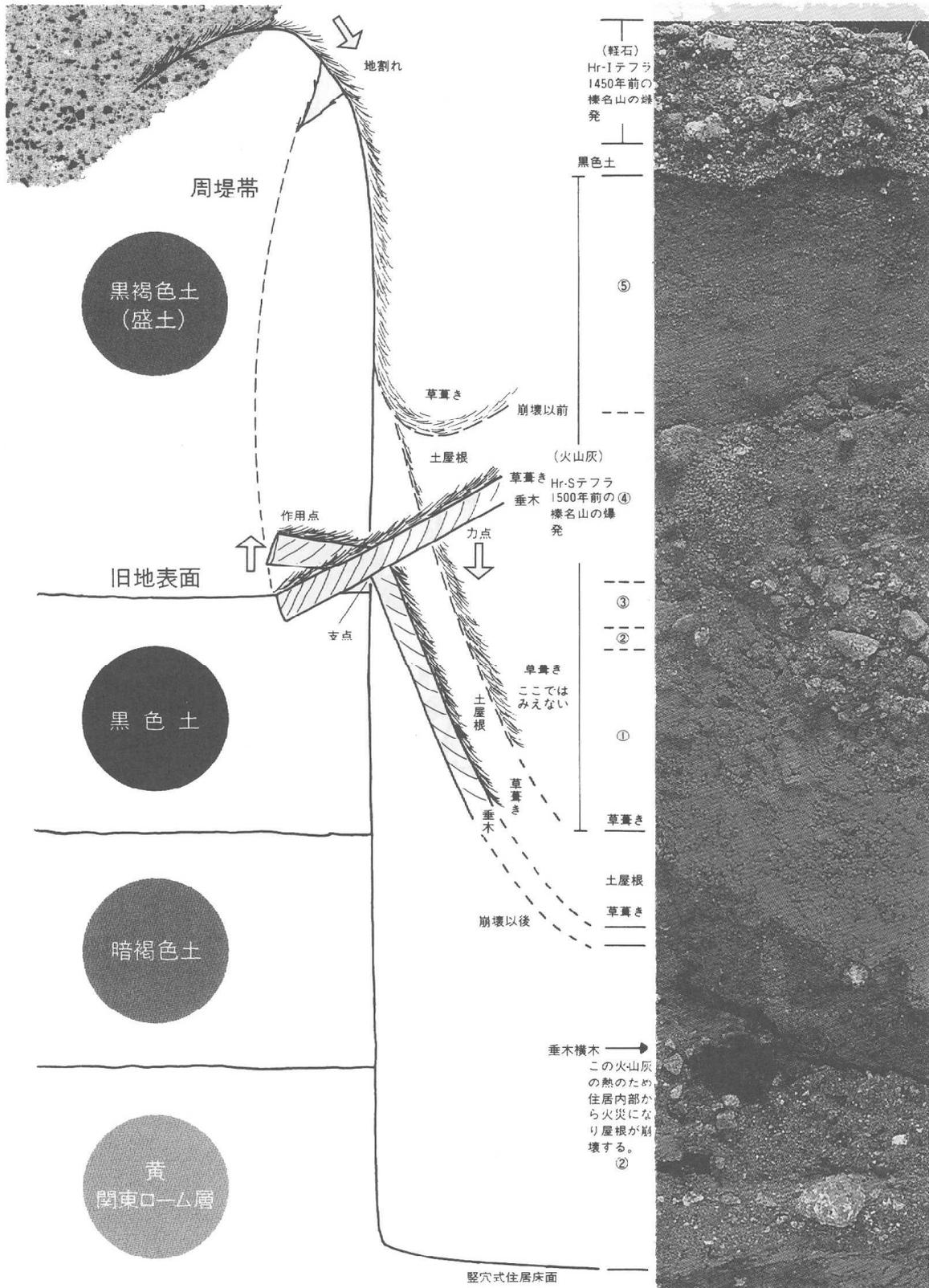


写真11 1号竪穴住居の土層断面写真(右)と土層断面模式図

図5 群馬県中筋遺跡竪穴住居土層堆積状況からの土屋根の復原(大塚1998)

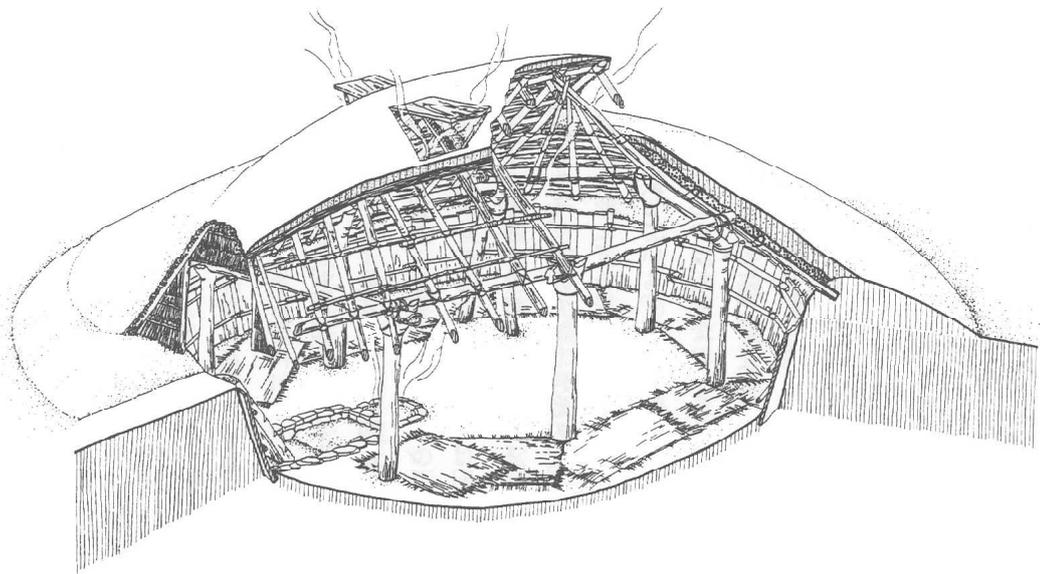
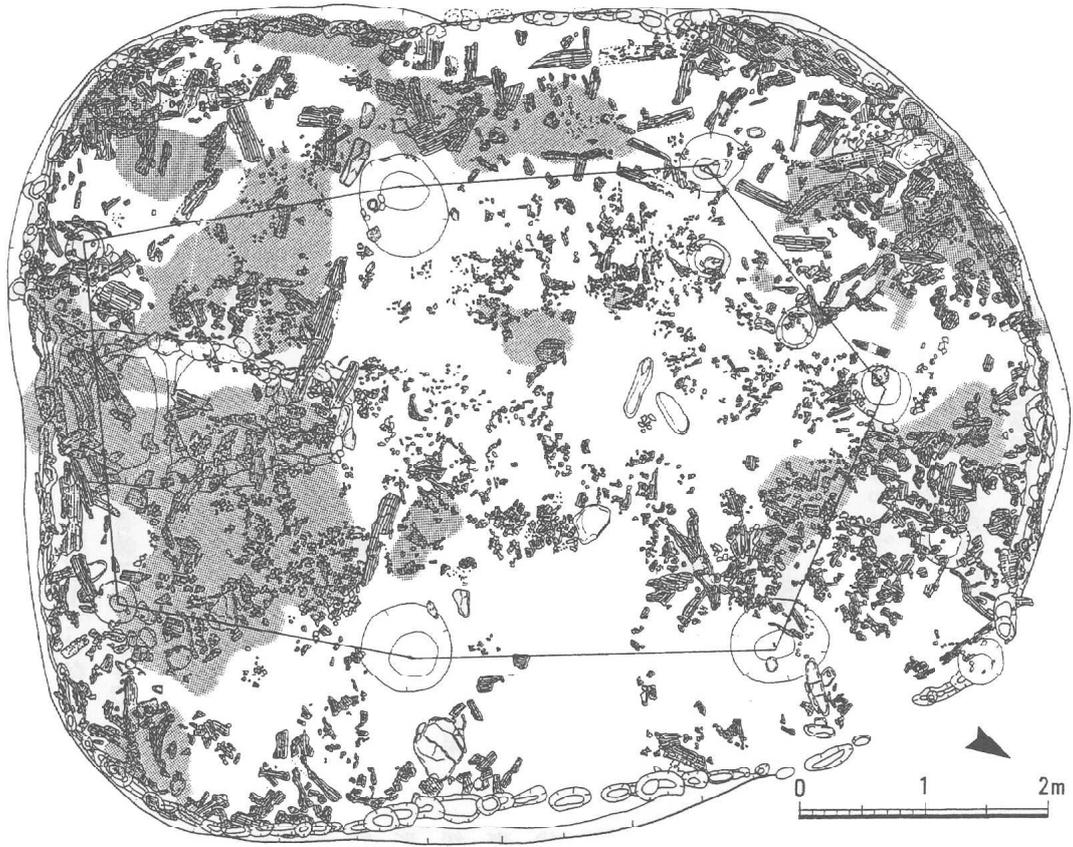


図1 岩手県一戸市御所野遺跡の西区で出土した焼失竪穴住居 DF22 住の遺構平面図と復原図

図6 岩手県一戸市御所野遺跡の西区で出土した焼失竪穴住居 DF 22 住の遺構平面図と復原図（高田2005）

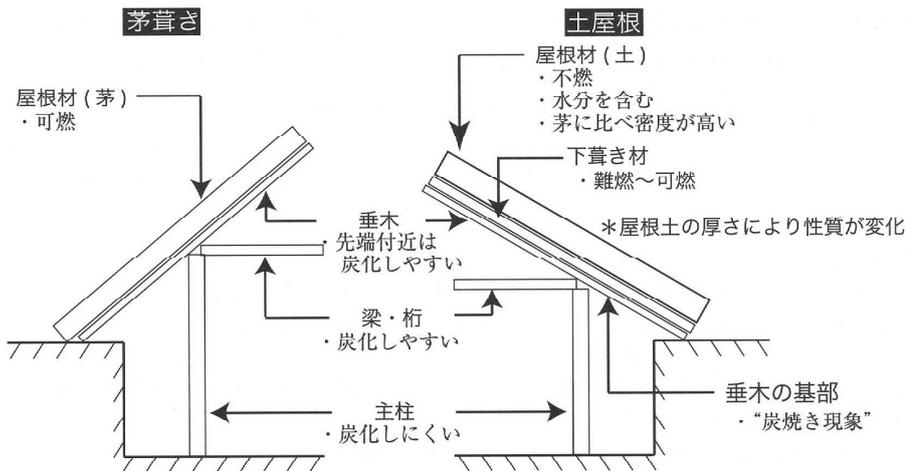
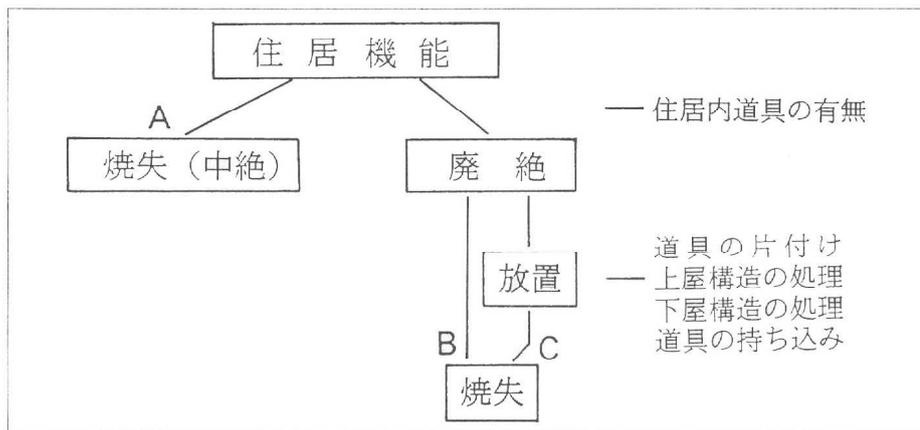


図2 茅葺きと土屋根による火災の違い

図7 茅葺きと土屋根による火災の違い (山本他2006)



第4図 焼失住居のライフサイクル

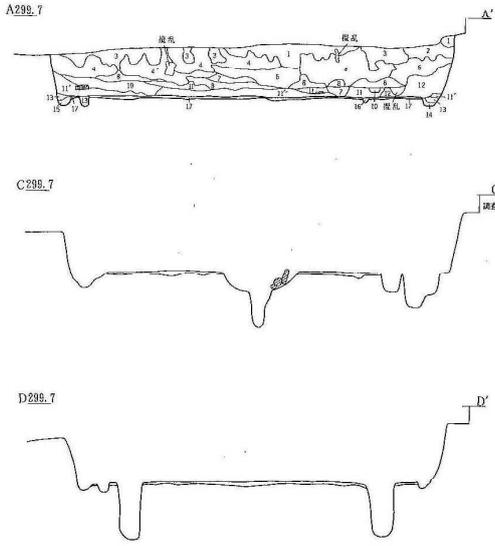
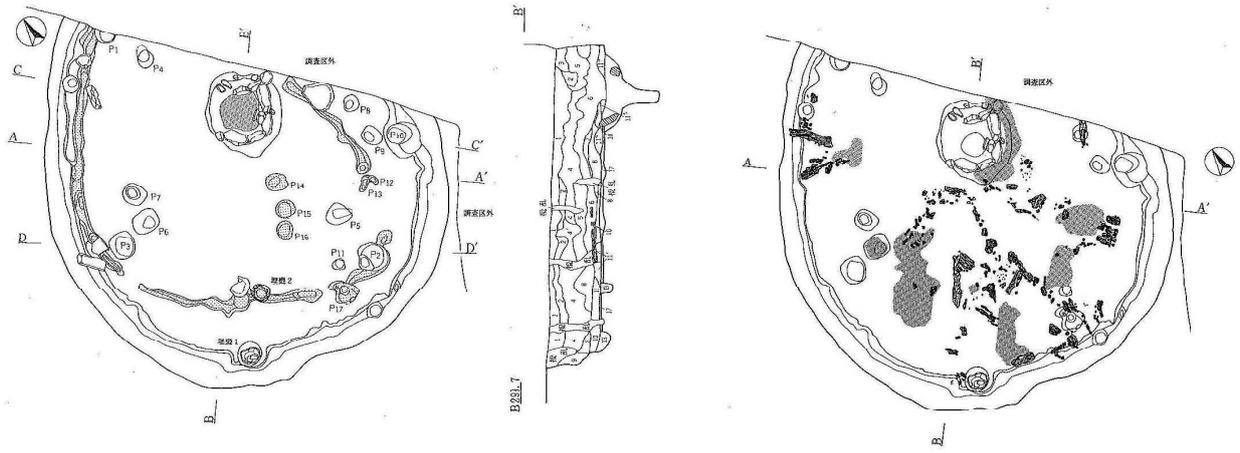
図8 焼失住居のライフスタイル (関間1997)

## 5. 個別の調査事例から焼失住居を考える

### ①相模原市緑区 (旧津久井郡津久井町)

青野原バイパス関連遺跡大地開戸遺跡 J 26号住居跡 (縄文時代中期後葉)

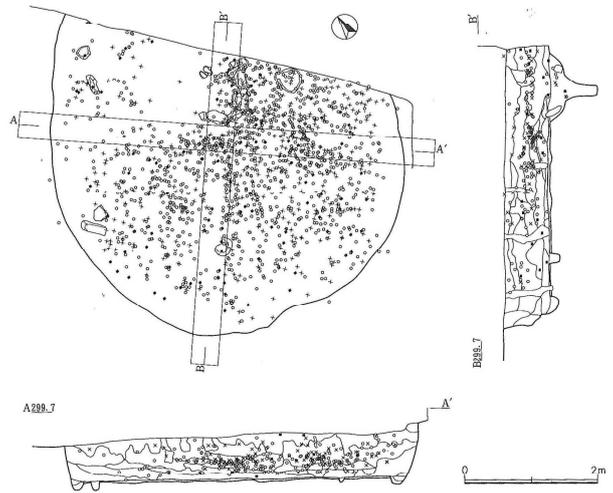
- ◆床面の被熱痕跡：被熱し、変色しているが、赤化はしていない。
- ◆炭化材：床面上に垂木と思われる木片が住居跡中央から放射状に伸びている。
- ◆焼土 (塊)：炭化材の上下に灰とともに斑文状に堆積。焼土はブロック状のものは多い (7・11・13層)。7・11層の間層 (8層) は焼土、炭下粒ともに微量含まれているに過ぎない。
- ◆出土遺物：床面にはほとんど無い。覆土内も小破片がほとんどである。
- ◆その他：石囲炉の炉石が1箇所抜かれいている。



ト計測表: mm

層	長さ	幅	高さ
P1	29	13	37
P2	40	36	62
P3	37	34	72
P4	22	21	71
P5	34	28	65
P6	37	28	69
P7	33	27	28
P8	23	20	37
P9	28	22	25
P10	34	28	45
P11	17	12	32
P12(15)	7	4	
P13(23)	6	5	
P14	30	24	3
P15	25	22	39
P16	25	21	20
P17	40	30	57

第212図 J28住居址焼土・炭化材出土状況図



第214図 J28住居址出土分布図

第211図 J28住居址

第2編 大地開戸遺跡

J28住居址土層説明

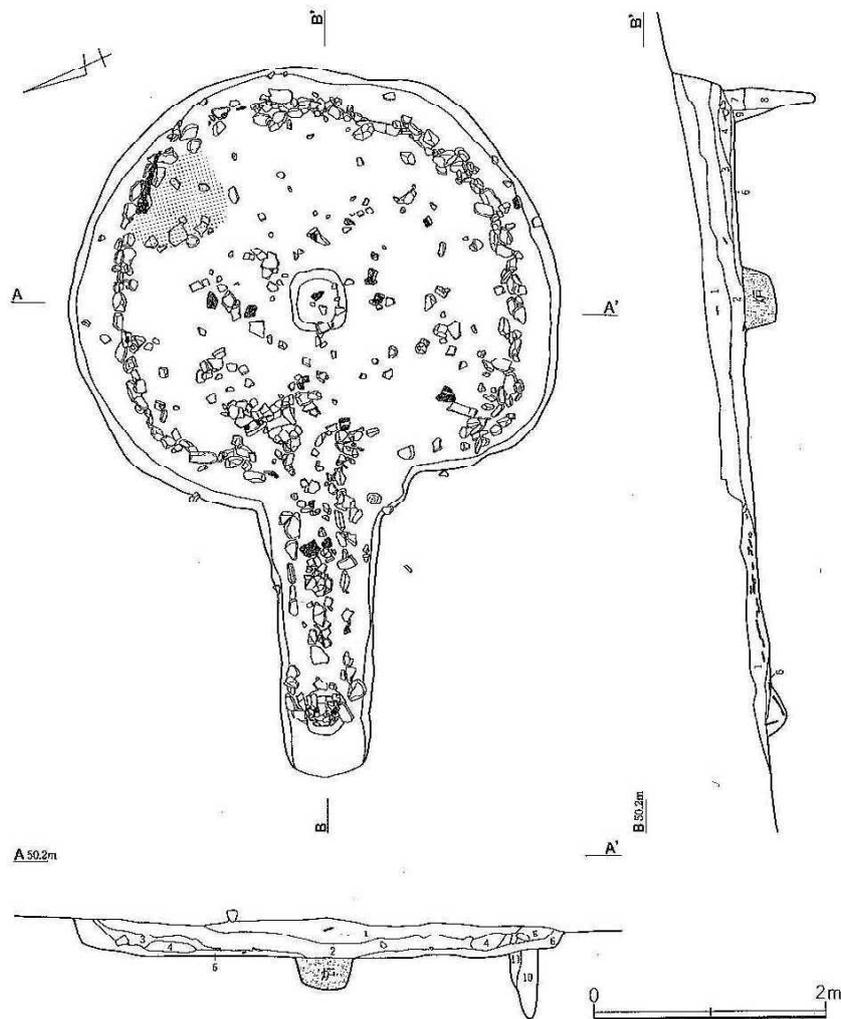
- 第1層 暗褐色土 粒子細かく、粘性、締りを有する。硬質である。径1~4mm程の赤色スコリアをやや多く、径2mm前後のスコリアを僅かに含む。
- 第2層 明褐色土 1層より粒子は細かく、強い粘性、締りを有する。硬質である。また、微細なローム粒を斑状に含む。
- 第3層 黒褐色土 粒子細かく、粘性、締りを有する。径1~5mm程の赤色スコリア、微細なパミス少量含む。
- 第4層 暗褐色土 粒子やや粗い、強い粘性、締りを有する。硬質である。
- 第4'層 灰褐色土 4層に径1~4mmの炭化粒、炭化物片の含有が著しい。
- 第5層 暗褐色土 粒子細かく、強い粘性、締りを有する。1層より軟質であるが、含有物は同じである。径1mm以下のパミス少量含む。
- 第6層 暗褐色土 粒子粗く粘性、締りに欠ける。径5mm以下のローム粒、微細なスコリア、炭化粒を少量含む。
- 第7層 赤褐色土 粒子細かく、粘性、締りを有する。焼土粒の分布が著しく、僅かに炭化物片も含む。
- 第8層 黒褐色土 粒子細かく、粘性、締り強い。径1~3mm程の赤色スコリア、径10mm以下の炭化物片を僅かに含む。
- 第9層 暗褐色土 粒子細かく、強い粘性、締りを有する。1層より軟質であるが、含有物は同じである。径1mm以下のパミス少量含む。
- 第10層 明褐色土 粒子細かく、粘性は弱い。締りはとても強い。径2~4mmの赤色スコリアを多く含む、炭化粒も少量含む。
- 第11層 赤黒褐色土 粒子粗く、粘性、締りに欠ける。炭化粒、炭化物片、焼土粒の含有が著しい。
- 第11'層 暗褐色土 粒子細かく、粘性は弱く、締りはやや強い。径1~3mmの赤色スコリアを多量、炭化粒を少量、焼土粒を多量、ローム粒を部分的に若干量に含む。
- 第11''層 暗褐色土 11'層と比較して焼土粒の混入が多い。
- 第12層 明褐色土 粒子細かく、粘性やや強く、締りあり。径1~3mmの赤色スコリアを少量、炭化粒を少量含む。
- 第13層 黒褐色土 粒子細かく、強い粘性、締りを有する。ローム粒、炭化物をブロック状に分布する。
- 第14層 明褐色土 粒子細かく、粘性はやや強く、締りはやや弱い。径1~3mmの赤色スコリアを少量、炭化粒を微量含む。周溝底部の上。
- 第15層 黄褐色土 粒子細かく、強い粘性、締りを有する。硬質である。微細なローム粒を主体に形成する。
- 第16層 暗褐色土 粘性強く、締り弱い。径2~5mmの赤色スコリアを微量、ローム粒を多量、炭化粒を少量含む。
- 第17層 明黄茶褐色土 粒子粗く、粘性に欠け、強い締りを有する。赤色スコリア(径2~6mm)を多量に含む。ローム粒、ロームブロックが主体をなす。貼床。



②横浜市緑区

長津田遺跡群玄海田遺跡柄鏡形住居SI006（縄文時代中期末葉）

- ◆床面の被熱痕跡：記載なし。
- ◆炭化材：明確なものは出土していないが、覆土下層の各層で炭下粒が混在している。
- ◆焼土：住居北側に広い範囲で確認されている（住居覆土4層）。周礫との関係は不明としているが、断面図では周礫の内側に焼土を多く含む層が確認できる。
- ◆出土遺物：周礫は被熱痕跡が認められるものが多いが、すべて被熱しているとはいえない。大形の深鉢形土器が2固体ほぼ床面で出土している。そのうち1点は、強く被熱しており一部発泡している。



- 1層 明茶褐色土 赤色スコリア（径2mm）を少量含む。粘性あり、しまりあり。
- 2層 暗褐色土 焼土粒を微量、赤色スコリア（径2mm）を少量含む。粘性あり、しまりあり。
- 3層 明茶褐色土 焼土粒を少量含む。粘性あり、しまりあり。
- 4層 明茶褐色土 焼土粒を多く、炭化粒を少量含む。粘性ややあり、しまりややあり。
- 5層 明茶褐色土 焼土粒を少量含む。粘性あり、しまりあり。
- 6層 明褐色土 赤色スコリア（径1mm）を微量含む。
- 7層 暗褐色土 赤色スコリア（径1mm）を少量、炭化粒を微量含む。粘性あり、しまりあり。
- 8層 暗褐色土（7層より暗）赤色スコリア（径1～2mm）を少量含む。サラサラしてしまりなく、粘性なし。
- 9層 暗茶褐色土 ローム粒を少量含む。しまりあり、粘性ややあり。
- 10層 暗褐色土 赤色スコリア（径1mm）を少量含む。炭化粒微量。粘性あり、しまりあり。
- 11層 暗褐色土（7層より暗）赤色スコリア（径1～2mm）を少量含む。サラサラしてしまりなく、粘性なし。

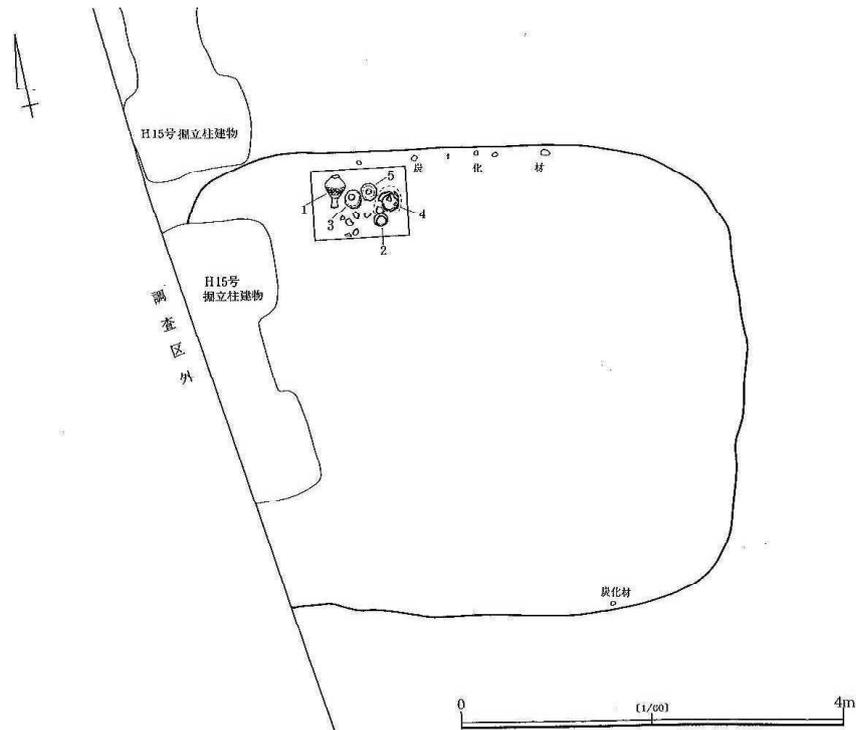
第53図 柄鏡形住居S I 006 [1/60]



### ③茅ヶ崎市

西方A遺跡Y1号住居（弥生時代中期後半）（小グリッドの調査以外は未掘）

- ◆床面の被熱痕跡：遺構保存のため、覆土上から露出している土器とその周辺のみ調査が行われたため、床面の状態は不明。
- ◆炭化材：遺構確認面で住居壁際に細い棒状の炭化材の痕跡が7本検出。
- ◆出土遺物：住居北西隅に入れた小グリッドの調査で、床面直上に倒置して置かれた土器4個体（壺、広口壺、甕2：うち2個体について地表面に近い部分は欠損）と完形壺が横たわる状態で出土している。



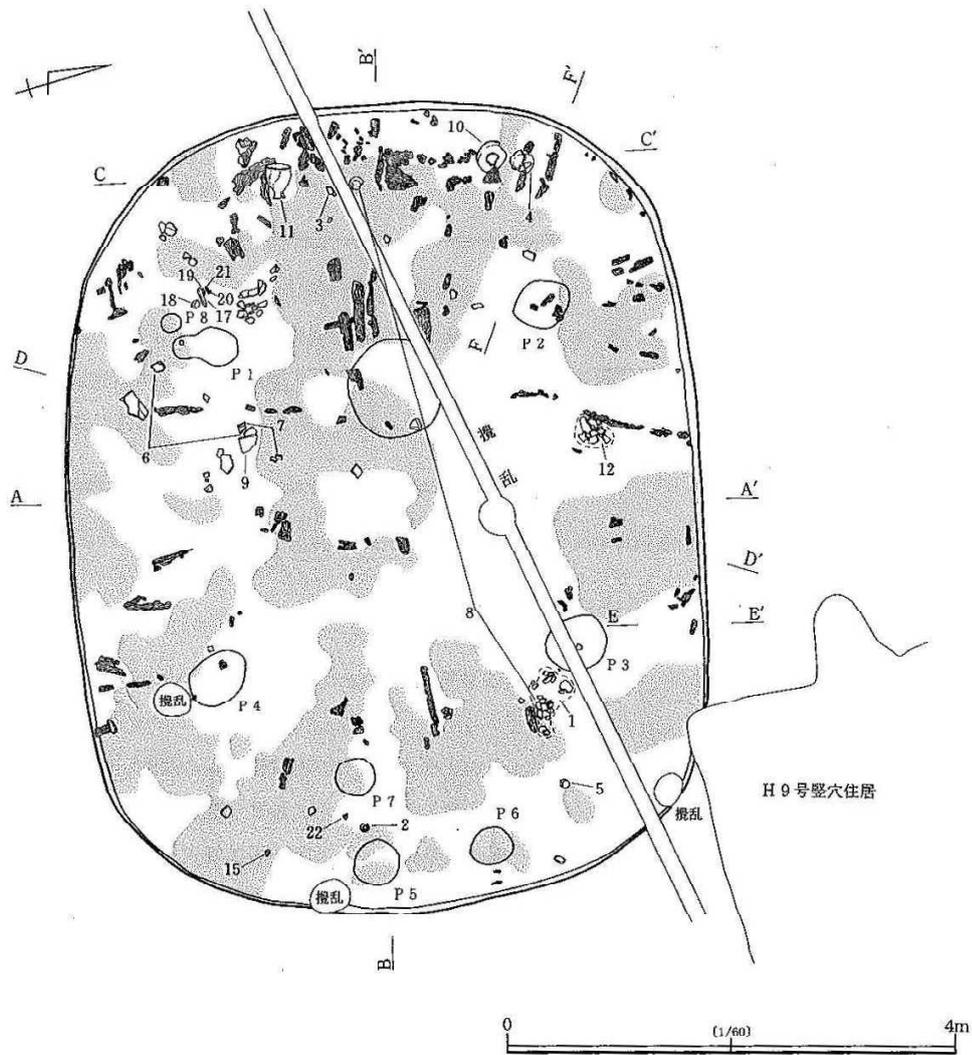
第23図 Y1号竪穴住居



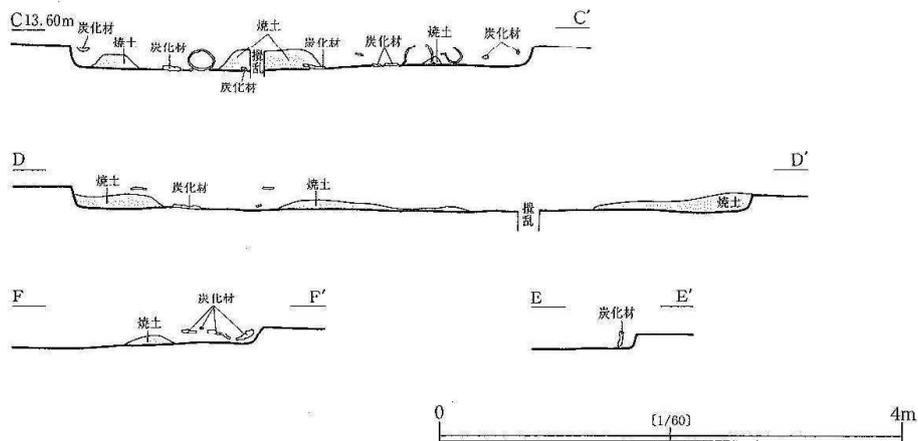
④茅ヶ崎市

西方A遺跡Y3号住居（弥生時代中期後半）（遺構保存のためピットは未掘）

- ◆床面の被熱痕跡：焼土が床面全体に広がっている。床面の赤化はなし。
- ◆炭化材：ほぼ床面直上から出土。炭化材は出土状況から4種に分類でき、1種めは住居中央から放射状に延びるように検出。2種めは住居壁面に沿って等間隔で直立して出土、3種めは支柱穴と思われるピット痕の内側に直立するように検出、4種めはほぼ完形の土器と混ざるように出土している。また、床面からは草本類を平編みしたものと思われるものが見つかっている。
- ◆焼土：床面全体に広がっている。炭化材はこの焼土内か上面で見つかっている。
- ◆出土遺物：住居奥壁よりに多く見つかっている。うち甕2点は倒置した状態で出土している。



第31図 Y3号竪穴住居 遺物出土状況



Y3号住居土層説明

第1層：暗褐色

3cm以下の赤色スコリアを多量、炭化粒を少量、焼土粒をやや多く含む。しまり強く、粘性弱い。

第2層：暗褐色

3cm以下の赤色スコリアを多量、炭化粒をやや多く、焼土粒を多量、焼土ブロックを多量に含む。しまりやや強く、粘性弱い。

第3層：暗茶褐色

炭化粒を少量、焼土粒を多量、焼土ブロックを含む。しまり強く、粘性弱い。

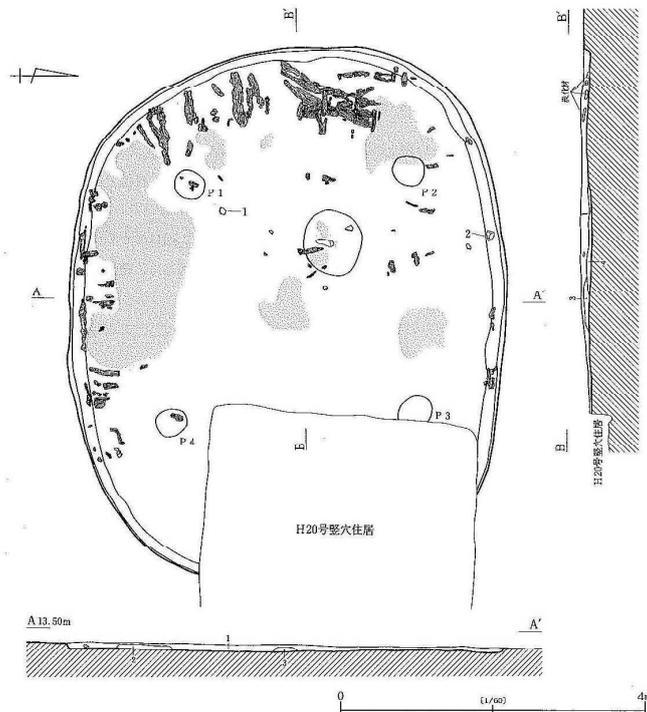
第29図 Y3号竪穴住居 (2)



⑤茅ヶ崎市

西方A遺跡Y6号住居（弥生時代中期後半）（遺構保存のためピットは未掘）

- ◆床面の被熱痕跡：広く被熱し、赤化が認められた。
- ◆炭化材：住居西側奥壁寄りで多数出土。垂木及び囲板・囲柴の留め杭と考えられる炭化材は、樹種同定を行い、いずれもクヌギ節との分析結果が出ている。
- ◆焼土：南側を中心に住居の内周を巡るように分布しており、特に炭化材が集中している範囲には顕著であった。
- ◆出土遺物：確認面から床面まで約9cmほどしか無いせいか、炭化材以外の出土遺物は極めて少ない。



Y6号住居土層説明

第1層：暗赤褐色

3cm以下の赤色スコリアを少量、焼土粒を少量、炭化粒を少量、炭化材を多量に含む。しりしり強く、粘性やや弱い。

第2層：暗茶褐色

焼土粒を極めて少量、炭化粒を少量、炭化材を散在的に少量に含む。しりしり強く、粘性弱い。

第3層：明褐色

焼土粒をやや多く、炭化粒を少量含む。しりしりやや強く、粘性やや弱い。

第4層：明褐色

2cm以下の赤色スコリアを少量、焼土粒を少量、炭化粒を散在的に含む。しりしりやや強く、粘性やや弱い。

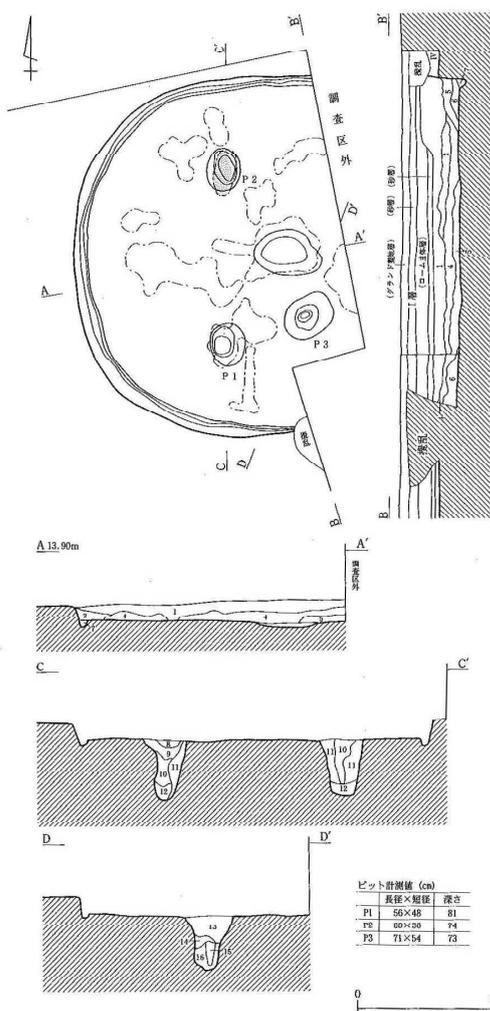
第44図 Y6号竪穴住居



⑥茅ヶ崎市

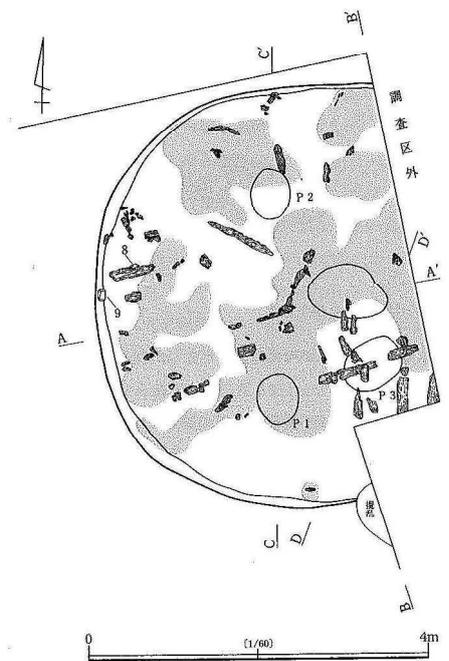
西方A遺跡Y10号住居（弥生時代中期後半）（遺構保存のため床面下は未掘）

- ◆床面の被熱痕跡：被熱し赤化していた。
- ◆炭化材：床面上から多数出土。最大85cm。出土状況に規則性は認められない。
- ◆焼土：床面上から多量に検出。
- ◆出土遺物：少量。土器は復原し得るものは無い。



第57図 Y10号竪穴住居

Y10号住居土層説明  
 第1層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアを極めて多量、5mm前後の黒色ヘーリアを少量含む。しまり・粘性は強い。  
 第2層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアをやや多く、3-5mmの黒色スコリアをやや多く含む。しまり・粘性は強い。  
 第3層：暗褐色  
 1m以下の赤色スコリアをやや多く含む。しまり・粘性ともに強い。  
 第4層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアを極めて多量、3mm前後の黒色スコリアを少量、炭化粒・焼土粒をやや多く含む。しまり・粘性ともに強い。  
 第5層：暗赤褐色  
 焼土粒を多量、炭化粒をやや多く含む。ロームブロックを少量含む。炭化材が各所で認められる。しまり強く、粘性弱い。  
 第6層：暗褐色  
 3m以下の赤色スコリアを少量、炭化粒を少量、焼土粒を少量含む。しまり・粘性ともにやや強い。  
 第7層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアをやや多く含む。しまりやや弱く、粘性やや弱い。  
 第8層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアを少量、炭化粒を少量、焼土粒を少量含む。ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまり・粘性はやや弱い。  
 第9層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアを少量、炭化粒・焼土粒を少量、ローム粒を少量含む。ロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性やや弱い。  
 第10層：暗褐色  
 2m以下の赤色スコリアを少量、ローム粒を少量、ロームブロックを少量含む。しまり弱く、粘性やや弱い。  
 第11層：暗褐色  
 3m以下の赤色スコリアを少量、ローム粒を少量、ロームブロックを少量含む。暗褐色土を少量含む。しまり・粘性はともにやや弱い。  
 第12層：黄褐色  
 3m以下の赤色スコリアを少量、ローム粒・ロームブロックを極めて多量に含む。しまり・粘性ともにやや弱い。ロームを主体とする。  
 第13層：暗赤褐色  
 2m以下の赤色スコリアを少量、炭化粒を少量、焼土粒を少量、ローム粒・ロームブロックを少量含む。しまりやや弱く、粘性強い。



第59図 Y10号竪穴住居 遺物出土状況



## 【参考引用文献】

- 1976 桐原健「土器が投棄された廃屋の性格」『考古学ジャーナル』127 ニューサイエンス社
- 1979 寺沢 薫「火災住居覚書＝大阪府観音寺山遺跡復元住居の火災によせても＝」『青陵』第40号  
奈良県立橿原考古学研究所
- 1985 石野博信「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念 獻呈論文集 乾』末永先生米寿記念会
- 1990 井上晃夫「復元家屋と焼失実験」『多摩考古』第20号 多摩考古学研究会
- 1990 桐生直彦「火災住居址から見た家財道具の在り方－東京都における縄文時代の事例分析－」東  
国史論第5号 群馬考古学研究会
- 1994 大島直行「縄文時代の火災住居－北海道を中心として－」『考古学雑誌』80-1
- 1995 石守 晃「復元住居を用いた焼失実験の成果について」『研究紀要12』（財）群馬県埋蔵文化財調  
査事業団
- 1995 弥生時代研究プロジェクトグループ「弥生時代竪穴住居の基礎的研究(2)」『神奈川の考古学の  
諸問題(Ⅱ)』かながわの考古学第5集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 1995 (財)かながわ考古学財団『青野原バイパス関連遺跡』かながわ考古学財団調査報告5
- 1996 小林謙一「竪穴住居跡のライフサイクルからみた住居廃絶時の状況－南関東の縄文中期集落で  
の遺物出土状態を中心に－」『すまいの考古学－住居の廃絶をめぐる』山梨県考古  
学協会 1996年度研究集会実行委員会
- 1997 閏間俊明「縄文時代の焼失住居跡に関する一考察(東京都内の縄文時代中期の事例から)」青山  
考古第14号 青山考古学会
- 1997 (財)かながわ考古学財団『長津田遺跡群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告14
- 1998 宮本長二郎「平地住居と竪穴住居の類型と変遷」『先史日本の住居とその周辺』同成社
- 1998 大塚昌彦「土屋根をもつ竪穴住居－焼失家屋の語るもの－」『先史日本の住居とその周辺』同成  
社
- 1998 工楽善通「コメント竪穴建物の機能」『先史日本の住居とその周辺』同成社
- 1998 浅川滋男・宮本長二郎・工楽善通・大塚昌彦・岡田英男ほか「討論」『先史日本の住居とその周  
辺』同成社
- 1998 高田和徳・西山和宏「コメント縄文土屋根住居の復元－御所野遺跡の実験－」『先史日本の住居  
とその周辺』同成社
- 1999 麻柄一志「焼かれた村－北陸地方の火災住居について－」『考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志  
社大学考古学シリーズⅦ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 1999 高田和徳「縄文時代の火災住居」『考古学ジャーナル』447 ニューサイエンス社
- 1999 大島直行「縄文時代火災住居の意味」『考古学ジャーナル』447 ニューサイエンス社
- 2000 林謙作・岡村道雄編『縄文遺跡の復元』学生社
- 2001 石守 晃「復元住居を用いた焼失実験 再び」『研究紀要19』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 2001 久世辰男『集落遺構からみた 南関東の弥生社会』六一書房
- 2002 高橋泰子「焼失家屋の一考察－竪穴建物の上部構造復元をめぐる－」『土壁』第6号 考古学  
を楽しむ会
- 2003 高田和徳「焼失住居跡の分布とその意味」『考古学ジャーナル』No.509 ニューサイエンス社
- 2003 麻柄一志「北陸地方の焼失住居」『考古学ジャーナル』No.509 ニューサイエンス社
- 2003 石守 晃「焼失実験と関東北部の焼失住居」『考古学ジャーナル』No.509 ニューサイエンス社
- 2003 小暮伸之「縄文中期集落における火災住居の性格－馬場前遺跡・上ノ台 A 遺跡の事例分析から  
－」『福島県文化財センター白川館 研究紀要2003』
- 2003 (財)かながわ考古学財団『下寺尾西方 A 遺跡』かながわ考古学財団調査報告157
- 2005 高田和徳『縄文のイエとムラの風景・御所野遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」015 新泉社
- 2006 山本勇・村田六郎太・横田正美・村本周三「史跡加曾利貝塚における復元住居火災の一事例」『貝  
塚博物館紀要』第33号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 2008(独法)国立文化財機構 奈良文化財研究所編『日本各地・各時代の焼失竪穴建物－北海道・岩手  
県・宮城県・栃木県・石川県・愛知県・広島県・鹿児島県－』本文・図版編
- 2013 総務省消防庁『防災白書』
- 2014 岡村道雄『縄文人からの伝言』集英社